のこのこちゃん

作　折田

登場人物

のこのこちゃん
たろー
四ツ谷くん
まり
はなちゃん
神路さん
ななめおじさん
先生
こどもたち(多数)

のこちゃん
涼

1　学校

先生「次の道徳から、自分たちの人生を知る時間になります。おうちの人に聞いたことがある人はいますか？」
四ッ谷くん「はい！」
先生「四ッ谷くん」
四ッ谷くん「前世の自分の記録を読むんだよね。オレ、もう見たことある！」
先生「お。どうかな、難しくなかった？」
四ッ谷くん「うーん、分かんないけど、オレ、ショーセツ書く人になるんだって」
先生「じゃあ今から作文頑張らなきゃ。みんな、いいかな？　今四ッ谷くんが言ったように、次の道徳からみんなには、前世の自分について知って、そして今世ではどう生きるかを勉強してもらいます。必ず前世ノートを持ってくるようにしてください。忘れたら授業出来ないから、おうちの人にも言っといてね。はい、それじゃあ算数の準備してください」
生徒「はーい」

チャイムが鳴る。
先生、退場。生徒たち、思い思いに喋る。
のこのこ、トイレへ。

まり「前世ノートだってえ」
たろー「僕も読んだことある。お母さんが見せてくれた」
四ッ谷くん「なに書いてあった？」
たろー「僕、前の人生では５９才で死んじゃったんだって。あと、サッカー選手になってもならなくてもいいって」
四ッ谷くん「どっちだよ」
たろー「選手はどっちでもいいけど、監督にはなるみたい」
まり「私ね読んでないけど、どんなのか見たことあるよ。お母さんが、難しくて分かんないと思うけど、見てもいいよってくれたの」
四ッ谷くん「くれたのに読んでないの？」
まり「うん。真っ白だから汚しそうで、あんまりベタベタせずに宝物箱に入れたの」
たろー「どうせなら真っ黒で良かったのにね」
四ッ谷くん「デスノートじゃん」
はなちゃん「四ッ谷くんしっ」
四ッ谷くん「ん」

はなちゃん「四ッ谷くん小説家なんだね。神路さんがね、本読むの好きだから、サイン
もらっとこうかなあって」
四ッ谷くん「そんなのないよ。考えとく」
はなちゃん「決まったら教えて！」
四ッ谷くん「うん」
神路さん「小説、いつから書くの？」
四ッ谷くん「分かんない。今はサッカーのほうが楽しいし……」
はなちゃん「私も前世ノート見たよ。２５才までに世界一周したいって書いてた」
神路さん「私は警察官になるって……ちょっと怖いけど、頑張らなきゃね」

のこのこ、教室へ。

四ッ谷くん「あ、のこのこ」
まり「のこのこちゃん」

のこのこ、立ち止まる。

たろー「のこのこちゃんは、何になるの？」
のこのこ「私？」
まり「前世ノート見たことある？　何になるって書いてた？」
のこのこ「私は～……」
四ッ谷くん「のこのこは？」
生徒全員「のこのこちゃんは何になるの？」
のこのこ「私は何になるんだろう？」

オープニング。
これから何かが起こりそうな音楽。
子供達が愉快にまわり、次のシーンへ。

2　教室

まり「人間は、他の動物よりも、少しだけ特別なのです。だから神様は人間に生を二回
くださりました。人間は一度死んでから、記憶を失くして、もう一度だけ生まれる
ことが出来るのです。いろんな動物がおりますが、人間だけが、二回生きることを
許されるのです」

先生「はい、そこまでいいですよ。よく読めました。みんなはこれから二年生になるまで、前世の記憶をしっかり吸収して、今世をどう生きるか知っていくからね」
たろー「先生。魂のサイクルって何ですか？」
先生「それは難しいから六年生になったら勉強します」
四ッ谷くん「ちょー未来じゃん！」
たろー「六年生かあ」
先生「前世ノートの３０ページを開いてください。そこにはみんなの今世の生き方が書いています。みんなはまず、これをしっかりと覚えましょう。自分が何を目指すのか、何になるのか、そのためにどう生きるのか、ここに書いてあることはみんなの人生そのものです。これを覚えないことには、みんなは大人になれません」
はなちゃん「先生はここに、先生になるって書いてあったんですか？」
先生「もちろん」
生徒１「先生の前世は何だったの？」
先生「あ、それはね、あんまり聞かない方がいいことなの。みんなも覚えといて。前世の話はとってもデリケートなので、話してもいいし聞いてもいいけど、それはとっても仲良しな人とだけにしてください」
生徒２「デリケートってなに？」
先生「うーん、難しいけど、人によっては前世を聞かれることがすごく嫌だったり恥ずかしかったりするから、あんまり聞いちゃダメなんだって覚えといてね」
生徒２「はーい」
四ッ谷くん「変なの」
まり「前世の話はおねしょしたこと話すみたいなもんだってお母さんが言ってたよ」
四ッ谷くん「なにそれ」
まり「おねしょって寝てるから記憶はないけど、自分がやったことでしょ。前世も、記憶はないけど、自分がやったことだからって」
四ッ谷くん「なにそれ」
まり「えー、分かんないの？　じゃあ分かんないよ」
先生「はいはい。それじゃみんな、四人一組になってください。四人あつまったら、みんなで自分が将来何になるかお話してください。今度ひとりひとり黒板の前立って発表してもらうからね。はい、みんな動いて」
まり「四ッ谷くん」
四ッ谷くん「たろー」
たろー「のこのこちゃん」
のこのこ「呼んだ？」
たろー「呼んだ。これで四人だね」
はなちゃん「四ッ谷くん。あれ、四ッ谷くんもうチーム出来たの？」

四ッ谷くん「うん。なんで？」
はなちゃん「私たちのところ入ろーよ。神路さんが四ッ谷くんと小説の話したいって」
のこのこ「でも今から発表の練習だから小説の話出来ないよ？」
はなちゃん「そういうことじゃないじゃん。のこのこちゃんのイジワル」
たろー「あつまったからはやく練習しなきゃ。はなちゃんと神路さんも、はやくチーム探さなきゃ先生に怒られちゃうよ」
神路さん「うん。はなちゃんいこ」
はなちゃん「四ッ谷くんまたね」
たろー「のこのこちゃんイジワルじゃないから大丈夫だよ」
のこのこ「うん」
先生「チーム出来たら練習してねー」
まり「練習しなきゃ。誰からする？」
四ッ谷くん「オレ読むよ。えっと、……えー、オレ、自分のこと私っていうのキモい」
たろー「そんなことないって。大人は自分のこと私っていうらしいよ」
四ッ谷くん「大人って変なの。やっぱりまりから読んで」
まり「ええ？　もー。……私は、しょうがい、どくしんを、つらぬきます。しゅっせして、男にも負けないくらいお金をかせいでください。……毒をしゅっしゅして男子に負けないくらいお金を貸せ貸せって言うってこと？」
四ッ谷くん「変な将来だな」
のこのこ「なんかおもしろそう」
たろー「独身って聞いたことあるよ。結婚しないことだって」
まり「毒じゃないの？」
たろー「違うと思う」
まり「私結婚しないの？」
たろー「書いてるならそうなんじゃない？」
まり「へえ〜。たろー頭いいね」
四ッ谷くん「じゃあ次。のこのこは？」
のこのこ「私はね、えっと……決まってない」
四ッ谷くん「え？」
まり「え？」
のこのこ「まだ決まってないって書いてる」
たろー「どういうこと？」
のこのこ「まだ決まってないって書いてるんだもん」
四ッ谷くん「そんなことある？」
まり「それじゃあのこのこちゃん大人になれなくない？」

のののこ「どうしよう。大きくなったらジンベイザメと泳ぎたいのに、大きくなれなかったら泳げないってこと？」
四ッ谷くん「ジンベーザメってなに？」
のののこ「すごい大きなサメ」
四ッ谷くん「どれくらい？」
のののこ「うーんと、四ッ谷くんが１００人いるくらい」
四ッ谷くん「オレが１００人！？　めっちゃ強そう！」
のののこ「強いかは分かんないけど、人は食べない」
まり「サメなのに？」
のののこ「うん」
たろー「お嫁さんって言っておこう」
のののこ「なにが？」
四ッ谷くん「ジンベーザメが？」
たろー「のののこちゃんの将来だよ。まだ決まってないって、多分、すごく大変なことだと思う」
まり「先生に言わなきゃ」
四ッ谷くん「おお、そうだよな。のののこ大きくなれなきゃジンベーザメと泳げないもんな」
のののこ「うんうん」
たろー「ううん。先生には言っちゃダメだ」
四ッ谷くん「なんで？」
たろー「僕らの将来は、一回目の僕らが決めるんだ。でも、一回目の僕らが決めてないってことは、もう誰にも決められないってことだよ」
まり「だから先生に言って、大人になんとかしてもらわなきゃ」
たろー「言ってどうするの？　のののこちゃんの将来は、前世ののののこちゃんが決めるのに、それが決まってないんだよ。誰が決めるの？　先生も、のののこちゃんのお母さんも、国の偉い人も決められないんだよ？」
四ッ谷くん「じゃあ、どうするんだよ、のののこ……」
たろー「３０ページに書いてなくても、違うところに書いてるかも。とにかくのののこちゃんは前世ノートを全部読む」
のののこ「そんなすぐ読めないよ」
たろー「だからとりあえず、お嫁さんってことにしておこうよ」
まり「嘘だってバレたら？」
たろー「大丈夫だよ。前世ノートは自分以外見れないでしょ」
四ッ谷くん「大丈夫かなあ」

まり「結婚なら、誰と結婚したいとか、相手に求めるものとかが書いてあるってお母さん言ってたけど、のこのこちゃんどうするの？」
のこのこ「優しい人がいいな」
たろー「よし。僕ってことにしておこう」
のこのこ「わかった」
まり「えー！　なんかえっち！」
四ッ谷くん「えっちなことすんなよ！」
たろー「バカ！　しないよ！」
のこのこ「ちゅーってこと？」
まり「きゃー！」
四ッ谷くん「きゃー！」
たろー「のこのこちゃんちょっと黙って」
まり「ちゅーしなきゃ結婚出来ないもんね！」
四ッ谷くん「教室でちゅーすんなよ！」
たろー「うるさいな。怒るからな」
のこのこ「しないよ～」
先生「はい、みんな、練習はそこまでね。次の道徳までに前世ノートの三ページから二八ページを読んできてください。わからない言葉があったらノートにまとめて先生に見せるか」

チャイムが鳴る。

先生「(被せて)お父さんお母さんに聞いてください。じゃあ国語の準備して休憩」

先生退場。
のこのこ、前世ノートを読む。
生徒たち少しずつ退場。
のこのこだけが残る。

のこのこ「……私はとても身体が弱く、３０才まで生きられないと言われています。今は２９才です。死んでしまっても平気だと周りは言っています。なぜなら私にはまだ次の人生があるからです」

のこ、病人の姿で登場。

のこのこ「なんにも出来ない人生でした。子供の頃は縄跳びも、ドッチボールも、竹馬も一輪車も、なんにもできなくて、ずうっと車椅子からみんなの姿を眺めていました」

のこ「飛行機に乗ってみたかったな。雲の上を見てみたかった。違う国に行ってみたかった。あなたはどうですか？縄跳びも竹馬も出来るくらい、元気な身体で生まれましたか」

のこのこ「縄跳びも竹馬も得意だよ。へえ、前世の私って、身体弱かったんだなあ」

のこ「私が出来なかったことは、次の私がやってくれるからねって周りは励ましてくれます。だから怖くない。死んでも、次があるからって……涼くんも、次の人生でも私を探すからって言ってくれたな。涼くんはね、学生の頃知り合ってもう6年くらい付き合ってるのよ。さいしょに私が涼くんのこと好きになってすっごくアタックしたんだけど、詳しいことは、ふふふ、ナイショ！　恋の話はデリケートだもん。私にだって教えてあげない」

のこのこ「ええー、ナイショにされたら前世の私のこと知れないよお」

のこ「涼くんと会えたら、また好き同士になれるのかな」

のこのこ「どうかなあ。好きって分かんない」

のこ「それまでにお互い相手がいる可能性だってあるもんね。困るな、私、涼くんよりそっちの方が好きになっちゃったらどうしよう。涼くんだって、私より既に付き合ってる相手を選ぶかもしれないし」

のこのこ「泥沼だ。お母さんが好きなやつ」

のこ「ねえ、死んでも平気だって、次があるって言うけれど、記憶がなくなっちゃうのに、どうして大丈夫なんて励ますんだろう。ねえ、これを読んでる私は」

のこのこ「私は」

のこ「本当に私なのかな。私はのこちゃん。身体が弱くて、涼くんが大好きで、もうすぐ死んでしまうのこちゃん。これを読んでるあなたは誰？」

のこのこ「のこのこちゃんだよ。縄跳びいっぱい出来て、涼くんと会ったことなくて、まだまだ死なないのこのこちゃん」

のこのこ、元気に走って退場。

3　放課後

チャイムが鳴る。

ランドセルを背負って駆けていく生徒。

四ッ谷くん「やべーよたろー。いっこ前のオレやべーよ」

たろー「なにが？」

四ッ谷くん「サッカーしたことないんだって」
たろー「それの何がヤバいの？」
四ッ谷くん「おいおいおい、おいおいおい、サッカーしたことないってやべーだろ。サッカーだぞ？」
たろー「そんなヤバいの？」
四ッ谷くん「やべえって。サッカーしたことないやつはヤバいって」
たろー「じゃあ女子全員ヤバくない？」
四ッ谷くん「女子は全員ヤバいよ」
たろー「そうかなあ。のこのこちゃんは？」
四ッ谷くん「のこのこもヤバいよ。女子だから」
たろー「のこのこちゃんはヤバくないけどなあ」

四ッ谷くん、たろー、腰を下ろす。

四ッ谷くん「たろーどこまで読んだ？」
たろー「３８ページまで」
四ッ谷くん「どんなの書いてた？」
たろー「僕、あんまりサッカー好きじゃないみたい。サッカーもだし、野球とか、スポーツ全部。格闘技は好きそう」
四ッ谷くん「え？　でも格闘技じゃなくて、サッカーの監督になるんだろ？」
たろー「うん」
四ッ谷くん「なんで？　サッカー好きじゃないのに？」
たろー「うん。僕、変な人なのかな」
四ッ谷くん「変人だ変人」
たろー「変かなあ」
四ッ谷くん「でも、いいよなあ。オレもたろーのがよかった。サッカー好きだもん。作文も小説も、サッカーよりやりたくない」
たろー「……まだサッカーしてていいじゃん」
四ッ谷くん「……そのうち、サッカーより好きになるのかなあ」

のこのこ、登場。

四ッ谷くん「あ、のこのこ」
のこのこ「バイバイ」
四ッ谷くん「なんでたよ。急いでんのかよ」
のこのこ「また明日ねって挨拶だと思った」

四ッ谷くん「違げーよ。ゆっくりしてけよ」
のこのこ「神社の階段でゆっくりするの良くないっておじちゃん言ってたよ」
四ッ谷くん「のこのこのおじいちゃんが？」
のこのこ「ううん。知らないおじちゃん。たまにここの前通る人」
たろー「分かった。ななめおじさんだ」
四ッ谷くん「誰それ」
たろー「いつもご機嫌ななめのななめおじさん」
四ッ谷くん「へえ、オレ見たことない」
たろー「僕もあんまりない」
四ッ谷くん「じゃあいつもご機嫌ななめか分かんないじゃん」
たろー「三回見たことあるけど、三回ともご機嫌ななめだったからさ」
のこのこ「ご機嫌いいときあるのかな」
たろー「それだとななめおじさんって呼べないけどね」

ななめおじさん、登場。

たろー「あ、あれがななめおじさんだよ」
ななめおじさん「アンタら何回言うたら分かるんだ。神社の階段に座るんじゃない」
四ッ谷くん「ここの神社使ってないじゃん」
ななめおじさん「神主がいなくなっても参拝に来る人間はいるんだよ。それに階段も神聖だ」
のこのこ「しんせいってなんですか？」
四ッ谷くん「もういいよのこのこ。逃げろ逃げろ」
たろー「すみません」
のこのこ「お邪魔しました」
四ッ谷くん「遠藤ん家まで競争！」

三人、退場。

ななめおじさん「全く」

と、神社に入っていく。

4　神社境内

のこ「どうですか。落ち着きません？」

涼「え、別に」
のこ「何が別にじゃい」
涼「先輩に対する口のききかたじゃないな」
のこ「すみません。とか言って気にしてないくせに」
涼「いいけど、あんまり調子乗ったら怒る」
のこ「怒られるう」
涼「怒られん努力をしてくれい」
のこ「ぬん」
涼「なにがぬんじゃ」
のこ「先輩〜」
涼「先輩じゃないですう」
のこ「すーぐそう言う。こんなに可愛い後輩に恵まれたこともうちょっと感謝してほしいっすわ」
涼「どこどこ？　可愛い後輩？　どこ？」
のこ「ここ、ここですよ〜」
涼「どこ〜」
のこ「も〜！……今日、ほんとは、こんな場所までついてきてくれるとは思わなかったです」
涼「感謝してほしいな」
のこ「ありがとうございます」
涼「二万円です」
のこ「たっか」
涼「やっす」
のこ「ちょっと手持ちがないので……」
涼「あ、銀行までついていきますけど」
のこ「取り立てじゃん」
涼「誰がヤクザじゃ」
のこ「そこまで言ってないですけど」
涼「言葉の裏を読んでみました」
のこ「深読みしすぎですね」
涼「で、何？」
のこ「何がですか？」
涼「自分の好きな場所見てほしかっただけ？」
のこ「はい、まあ……」
涼「いいんじゃない。僕は別に落ち着かんけど、廃れた神社は嫌いじゃないよ」
のこ「ここでね、竹馬やってる姿想像してみるんです」

涼「なんで竹馬？」
のこ「小さい頃全然出来なかったから。みんなが楽しそうにしてるの見て、いいなあって羨ましがるだけだったんです」
涼「今は出来るんじゃないの」
のこ「え、今？」
涼「うん」
のこ「今するの？」
涼「うん。想像するくらいなら実際やれば？」
のこ「え、えー。やりたいやりたい。ひとりじゃちょっと恥ずかしいけど、先輩いるし見といてください」
涼「何が悲しくて後輩が竹馬やってる姿見守らなきゃいけないんだ僕は」
のこ「あ、いま後輩って言った！」
涼「あーくそ間違えた。知り合い」
のこ「竹馬持ってこれば良かったなあ。次は持ってきますね」
涼「次がある前提？」
のこ「もちろん」
涼「僕は暇じゃない」
のこ「暇はつくるものですよ先輩」
涼「うるせえ知り合いだな」
のこ「もー後輩後輩」
涼「知り合い知り合い」

涼、知り合いと呟きながら退場。
のこ、後輩と修正しながら退場。

境内にななめおじさん登場。
参拝をしてから退場。
四ッ谷くんたち、おそるおそる登場。

四ッ谷くん「ななめおじさん行った」
たろー「オーケー。それじゃあ作戦会議だ」
四ッ谷くん「なんかカッコいい。ワクワクしてきた」
のこのこ「うん。でも何の作戦会議なの？」
たろー「えええ」
四ッ谷くん「のこのこのに決まってるじゃん。のこのこの将来の作戦会議っ！」
のこのこ「わかった」

四ッ谷くん「ほんとにわかってんのか」
たろー「いいよ。のこのこちゃん、前世ノートは全部読んだんだね？」
のこのこ「ううん。まだあと１０ページぐらい残ってる」
たろー「あー、まあいいか。何書いてた？」
のこのこ「涼くんって人が大好きだってこと」
四ッ谷くん「誰や涼くん」
たろー「へえ。でも今は好きじゃないもんね」
のこのこ「そうだね。知らない人だもん」
たろー「知らない人好きになれないよね」
四ッ谷くん「のこのこの将来は書いてなかったの？」
のこのこ「うん。涼くんとか、絵とか、ピアノとか、好きなもののこと、たくさん書いてた」
たろー「でも今は好きじゃないもんね」
のこのこ「絵好きだよ」
たろー「涼くんのことだよ」
のこのこ「知らない人好きになれないってさっき言ったよ」
たろー「だよね」
四ッ谷くん「たろーしつこいぞ」
まり「話は聞かせてもらった」
四ッ谷くん「うお、びっくりしたあ」
まり「のこのこちゃんの将来について考える作戦会議、私たちも混ざります」
のこのこ「ありがとう」
たろー「たち？」
はなちゃん「たちよ！」
神路さん「お邪魔します」
四ッ谷くん「うわ、いつから！」
はなちゃん「女の鼻は鋭いのよ」
四ッ谷くん「女こええ」
のこのこ「はなちゃんの鼻は丸くて可愛いよ」
はなちゃん「のこのこちゃんったら」
まり「それで作戦会議って何するの？」
たろー「話し合うんだ。先生たちにバレないように、のこのこちゃんが大人になれるように」
まり「たろーのお嫁さんじゃそのうちバレるもんね」
たろー「別にずっとそれでもいいけど、そうなるともっと細かく決めないとバレちゃうかも」

神路さん「細かくってどんなこと？」
たろー「いつまでに結婚したいとか、そもそも僕とのこのこちゃんは前世どこでどうやって出会ったのか、とか」
四ッ谷くん「なるほどな」
のこのこ「ねえ、たろーの前世の名前何？」
はなちゃん「わ、わ！　前世の名前ってあんまり教えちゃダメなんだよ」
のこのこ「そうなの？」
はなちゃん「うん。名前はすごくダメってお母さんが言ってた」
四ッ谷くん「なんで？」
はなちゃん「わかんないけど、デリケート、よりも、デリケートなのかも」
まり「ふうん」
たろー「のこのこちゃんになら教えてもいいよ。のこのこちゃんの将来についての作戦会議なんだし」
のこのこ「ううん。なんか、聞くの怖くなっちゃった」
神路さん「やっぱり先生たちに相談したほうがいいんじゃないかな」
まり「のこのこちゃんを殺すつもり？」
神路さん「え、ええ？」
まり「将来がないってことは、のこのこちゃんは大人になれないってことだよ。つまりのこのこちゃんは、大人になる前に殺されちゃうってことだよ」
はなちゃん「怖いよお」
のこのこ「死んじゃうのは困る。長生きはしてほしいって書いてた」
四ッ谷くん「え。じゃあのこのこは長生きするって将来？」
たろー「ううん。寿命は決められないよ」
のこのこ「みんなは？」
まり「なにが？」
のこのこ「みんなは何になるの？」
はなちゃん「私は世界一周。そのあとは外国でパートしながら、時々旅行して細々暮らすんだって」
まり「細々ってなに？」
はなちゃん「わからない。そう書いてた」
神路さん「私は警察官……。怖いけど、大丈夫かな……」
のこのこ「前世の自分が決めてくれたんだね。なんで私は、決めてくれなかったんだろう」
まり「なんにもなりたくなかったのかな」
四ッ谷くん「それならなんにもなりたくないって書いといてほしいよな」
たろー「それはそれで困っちゃうね」

ななめおじさん、登場。

ななめおじさん「こら、ガキども。ここは遊び場じゃないんだ」
四ッ谷くん「うわ、ななめおじさんだ。逃げろみんな」
まり「きゃー」
はなちゃん「きゃーきゃー」

子供たち、逃げる。
のこのこだけが残る。

ななめおじさん「なんだ、逃げなくていいのか」
のこのこ「なんで逃げるんですか？」
ななめおじさん「それもそうだ。逃げる必要はないな。たださっきも言ったがここは遊び場じゃないんだ。早く帰りなさい」
のこのこ「分かりました」

のこのこ、去ろうとする。

ななめおじさん「待ちなさい。君、名前はなんて言うんだい」
のこのこ「のこのこちゃん」
ななめおじさん「また変わった名前だな」
のこのこ「うん、みんな変って言うよ」
ななめおじさん「君はどう思ってるんだ？」
のこのこ「どう？」
ななめおじさん「自分で、変だと思うのか？」
のこのこ「分からないです」
ななめおじさん「君は変でありたいのか？」
のこのこ「変でありたい？」
ななめおじさん「変でいたいのか？」
のこのこ「いたいわけじゃないです」
ななめおじさん「覚えておきなさい。自分がどうありたいのか、いたいのか、決めれるのは自分だけだ」
のこのこ「それは、変、です」
ななめおじさん「なにがだい」
のこのこ「だって、将来は決まってるのに？」

ななめおじさん「決まってないさ」
のこのこ「え？」
ななめおじさん「どうして神様が、人間にだけ二度も生を与えるもんかね」
のこのこ「特別だから？」
ななめおじさん「愚かだな。この世界にあるものはみんな等しく特別だというのに」
のこのこ「ななめおじさん」
ななめおじさん「ななめおじさん？」
のこのこ「ここはなんの神様がいたの？」
ななめおじさん「健康を守る神様だよ。今もいるさ。忘れない限りな」

5　公園

前世ノートを読んでいるのこのこ。

のこのこ「絵、ピアノ、友だち、お花、小説、映画、家族、星、刺繍、写真、涼くん。私はたくさんのものが好きだったんだなあ」
のこ「そうだよ。たくさんたくさん、この世界は私の大好きなものであふれてるの。ねえ、あなたはなにが好き？」
のこのこ「水族館。ジンベイザメ。友だち。お母さんとお父さん。絵を描くのも好き。うさぎも、わんちゃんも、本も好きだよ。私もたくさん好きなものあるけど、あんまり私と一緒じゃないんだね」
のこ「そうだねえ。私は犬は苦手だな」
のこのこ「えー、私なのに」
のこ「だってあなたは涼くんを好きじゃないでしょ？」
のこのこ「知らない人だもん。好きになれっこないよ」
のこ「私なのに？」
のこのこ「私って難しいんだなあ」
のこ「かんたんだよ。ねえ、あなたはその人がその人であるためには何が大切なんだと思う？　いわゆる魂？　遺伝子？　思い出？」
のこのこ「難しいよお」
のこ「あ、これ読んでるの、小学生なんだもんね。んー、今はわかんなくていいんだ。私はね、思い出、記憶だと思うの。誰と出会い、どう生きたか、それによって人は人になっていくと思うんだ。でもこのせかいはいつの間にか、そんなことを忘れちゃったみたい。ねえ、あなたは本当に私なのかな？　環境も、出会う人たちも、好きになるものも、きっと私とは全然違うあなたは、本当に私なのかな？あなたは何がしたい？私が出来なかったこと、たくさんあなたに押し付けて良いのかな？でもね、私はこの私のままで、したいことが山のようにあったの。ねえ、あなたは何が

したい？涼くんのことがこれっぽっちも好きじゃないあなたは、あなたは、誰のことを好きになるんだろう」

のののこ「涙のあとだ……」

のののこ、ページを撫でる。

そこにたろー登場。

たろー「のののこちゃん」

のののこ「たろー。前世ノート、もうすぐで全部だよ」

たろー「オッケー、いいペースだね。(前世ノートを覗き)……やっぱ見えないや」

のののこ「いっぱい書いてるよ」

たろー「ははは。すごいよね」

のののこ「たろーのも見せて」

たろー「いいよ。あ、でもほんとは、あんまりノートを見せ合っちゃダメらしいよ」

のののこ「なんで？(たろーのノートを見て)なんも見えないのに」

たろー「さあ。見えないけど、よくないんだって」

のののこ「変なの」

たろー「変だね、大人って」

のののこ「たろーは前世ノートどこまで読んだの？」

たろー「半分くらいだよ」

のののこ「そっか。サッカーの監督になりたくなってきた？」

たろー「全然」

のののこ「そっか」

たろー「うん」

のののこ「たろーのノートには、好きな人のこと書いてた？」

たろー「えっ。あ、うん、まあ、うん。でも、今は全然好きじゃないからね」

のののこ「結婚したい人のこととか書いてないの？」

たろー「うん。結婚は好きな子とすればいいって」

のののこ「そうなんだ。良かったね」

たろー「うん。だから、のののこちゃんがこのまま、僕のお嫁さんってことでも大丈夫だよ」

のののこ「わかった」

四ッ谷くん「うわ、たろーとのののこがちゅーしようとしてる！」

たろー「してないよ！」

のののこ「結婚の話してただけだよ」

四ッ谷くん「ちゅーじゃん！」

のこのこ「違うよお」
四ッ谷くん「ちゅーう、ちゅーう！」
たろー「うるさいな」
のこのこ「四ッ谷くんのノートには、好きな人のこと書いてた？」
四ッ谷くん「書いてたよ。生まれ変わってもそいつのこと探したいんだって」
たろー「うわあ、ロマンチックだね」
のこのこ「どうやって探すの？」
四ッ谷くん「わかんないよ。なんか、そんな好きなら、ビビビッてわかるのかなって思
　　ってる」
のこのこ「名前は書いてないの？」
四ッ谷くん「書いてるけど前世の名前聞けないだろ。ま、ビビビッときたらそいつと結
　　婚してやるよ」
たろー「ビビビッか。難しそうだね」
のこのこ「ロマンチックって痛そうだね」
四ッ谷くん「痛くねーよ。ビビビッていうのは痛くねービビビッなんだよ、多分」
のこのこ「多分ってことは痛いかもしれないんでしょ？」
四ッ谷くん「ええ、痛いのはやだよオレ」
たろー「ははは。大丈夫だよ、ロマンチックなビビビッはね、痛くなかった」
四ッ谷くん「え、たろービビビッきたことあるの？」
たろー「うん」
四ッ谷くん「えー！　すげえ、えっちだな！」
たろー「もー、全然えっちじゃないよ」
四ッ谷くん「えっちだ、えっち」
たろー「もう、怒るよ」
四ッ谷くん「(笑いながら)逃げろー」
たろー「(笑いながら)スーパーパンチ、スーパーパンチ」
四ッ谷くん「のこのこも混ざれよお」
のこのこ「ワルイーノめ、正義のパンチをくらえ」
四ッ谷くん「ははは」
のこのこ「エンジェルビーム」
たろー「エンジェルパワー」
四ッ谷くん「うわあ、やられたー」

と、笑いながら退場。

6　教室

先生「はい、今日はここまで。みんな、自分の将来について結構見えてきたんじゃないかな。次の授業からは自分の未来をもっと想像してもらうために、今からなにをすれば良いのか、について考えてもらいます。例えば、四ッ谷くん」

四ッ谷くん「はい」

先生「四ッ谷くんは小説家になるんだから、今からたくさん本を読んだり、作文書いたりしなきゃだめだよね。そういう、自分が将来なるものに向けての勉強をしてほしいの。何が必要か考えてくるのが宿題です。起立、きをつけ、ありがとうございました」

チャイムが被さるように鳴る。
帰りの準備をする児童たち。

四ッ谷くん「たろー、帰ろうぜ」

たろー「うん。のこのこちゃん帰ろう」

のこのこ「いいよ」

はなちゃん「あ、のこのこちゃんまたねー」

神路さん「あ、のこのこちゃん、今から私たち……」

はなちゃん「あ、のこのこちゃんはいいの。なんでもないよ、またね」

のこのこ「うん。バイバイ」

女子、クスクスと秘密めいた笑み。
帰り道、放課後のサッカーを楽しむ子供達。
その近くを四ッ谷くんたちが通る。

四ッ谷くん「オレ女に生まれなくて良かった。ああやってさ、何人かで隠れて笑うの嫌だもん」

たろー「やってみたら楽しいのかもね。僕らもしてみる？　のこのこちゃん、うふふ」

のこのこ「うふふ」

たろー「うふふ」

のこのこ「うふふ。たろーこれ楽しくないよ」

たろー「そうだね」

四ッ谷くん「ちょっと怖いよお前ら」

まり「のこのこちゃーん」

のこのこ「まり」

まり「みんなー。一緒に帰ろ」

たろー「うん。グリコしながら帰る？」
四ッ谷くん「パーがパイナップルじゃなくてパラダイスキングバージョンならいいよ」
のこのこ「何それ」
まり「グリコってなに？」
たろー「まりちゃんグリコ知らないの？　えーとね、みんな同じ場所からスタートするんだけど、じゃんけんで勝った分だけ先に進めるんだ。一番はやくゴールできた人が勝ち」
のこのこ「グーで勝ったらグリコってみっつ進んで、チョキで勝ったらチヨコレイトでろっこ進んで、パーで勝ったらパラダイスキングだから、えーと」
たろー「はちこだね」
のこのこ「うわあ、パラダイスキング強い。かっこいい」

四ッ谷くん、途中ふと立ち止まり、サッカーをしている子供たちを見る。

まり「あれ、四ッ谷くんどうしたの？」
四ッ谷くん「サッカーしたいなあ」
たろー「明日のお昼休みしようよ」
四ッ谷くん「お母さんから、もうサッカーするなって言われたんだ」
たろー「なんで？」
四ッ谷くん「小説家になるから。今からサッカー嫌いになっておかないと、オレ多分ずうっとサッカー好きだもん」
のこのこ「好きじゃだめなの？」
四ッ谷くん「だって一生サッカー選手になりたいって思っちゃうよ。あーあ、なんでサッカー選手じゃないんだろうなあ」

四ッ谷くん、小石を蹴る。

四ッ谷くん「サッカー選手になりたいよ」
電車くん「ドアが閉まります、ドアが閉まります、ご注意ください。プルルル、プシュー、ティリリン、ドゥン、プオーン、ガタンゴトン、ガタンゴトン」
友だち「いいよなあ、電車の運転手。カッコいいよなあ」
電車くん「うん。やっぱオレ前世から電車好きだったんだ。早く大人にならないかな」
友だち「お前の運転してる電車絶対乗せろよ」
電車くん「安全運転で参りまあす」
友だち「ははは」
のこのこ「ピー。四ッ谷選手、ゴールは目の前だあっ！」

四ッ谷くん「え？」
のこのこ「さあ、追いかけるのはたろー選手とまり選手。ボールは奪えるのか？　観客
　ドキドキの試合です」
たろー「うおお、ボールを奪うぞー」
まり「サッカーわかんない。とりあえずあの石取ればいいの？」
のこのこ「まり選手、あれは石じゃなくてボールです。ボールを奪うのです」
まり「わかった。寄越せー！」

　たろー、四ッ谷くんの小石を奪おうとする。

四ッ谷くん「ははは、やれるもんならやってみろ」
のこのこ「おっと四ッ谷選手、華麗にかわす。さすがのプレイだ！」
たろー「くっ、手強い」
四ッ谷くん「ここで四ッ谷選手のスーパーシュート炸裂だあ！　決まったあ！　さすが
　四ッ谷選手！」
のこのこ「と見せかけてキーパーのこのこ選手がボールを見事キャッチ！」
四ッ谷くん「お前キーパーなのかよ！」
のこのこ「キーパーのこのこ選手、そのままボールを奪ってたろー選手にパス」
たろー「ゴール決めちゃうよ」
まり「私も蹴りたいよお。ちょうだい」
四ッ谷くん「めちゃくちゃだちくしょう。ボール返せ」

　四人、笑いながら、夕暮れのなかを駆ける。

7　病室

　ベッドに寝そべるのこちゃんと、椅子に腰をおろしスマホゲームをする涼。

のこ「甘いもの食べたい」
涼「我慢しろ」
のこ「甘いもの食べたいよお……」
涼「退院したら奢ったる」
のこ「やったあ」
涼「チロルチョコ」
のこ「何個？」
涼「一個」
のこ「ケチ」

涼「じゃあ買ってあげません」
のこ「アイスとかパフェがいい」
涼「退院したらな」
のこ「退院できるのかな」
涼「……知らん」
のこ「励ましてよ」
涼「なんて言って？」
のこ「出来るよとか言って」
涼「あるか分からん希望を持たせるのはちょっと」
のこ「意地悪だ」
涼「どうとでも」
のこ「好きです」
涼「どうも」
のこ「こっち見てよお」
涼「ゲーム中」
のこ「あーあ寂しくて死にそう」
涼「それは困る。君が死んだら退屈しそう、僕が」
のこ「私は暇潰しか」
涼「人生なんて全て暇潰し」
のこ「そうですね。特に私たちには、二回目があるもんね」
涼「そうね。……仕方ないから、次も探してあげるかな」
のこ「私を？」
涼「今の文脈的に君以外何を探すのよ」
のこ「んふふふふふ」
涼「キモ」
のこ「はあ、こんな可愛い後輩に向かって」
涼「後輩じゃないでしょ」
のこ「ひどい」
涼「ひどくない。恋人じゃないのか君は」
のこ「んふふふふふ」
涼「はよねろ」
のこ「はーい。おやすみなさい」
涼「おやすみ」
のこ「(細く)死にたくないなあ」

涼、のこちゃんの背中を見つめる。

涼「のこ」

のこ、寝ている。
涼、のこの頭を撫でる。
キスをしようとする。
直前、暗転。

8　神社

明かりがつく。

のこのこ「私は将来たろーくんのお嫁さんになります。私とたろーくんは前世で結婚を約束していた仲ですが、私が宇宙旅行の途中隕石との衝突事故で死んでしまったので、一度目の人生ではとうとう結婚することができませんでした。次こそは絶対にたろーくんと結婚し、ジンベイザメと一緒に泳いで、あと時々サッカーの審判もします」

四ッ谷くん「カンペキじゃん」
まり「いつ結婚するの？　って聞かれたら？」
たろー「２０歳かな。のこのこちゃんはドレスが着たい？　着物が着たい？」
のこのこ「ドレスかなあ」
たろー「わかった。結婚式のことは僕に任せてるって言えばいいよ」
のこのこ「うん」
四ッ谷くん「明日の発表会ミスんなよ、のこのこ」
まり「緊張するよねえ。私も練習しなきゃ」
たろー「よし、それじゃななめおじさん来る前に帰ろ。また明日ね」
まり「バイバーイ」
四ッ谷くん「たろー、階段の下まで競争しようぜ」
たろー「お先」
四ッ谷くん「ずるいぞ」
まり「私も混ぜて」

のこのこ、立ち止まり、作文を読む。

のこのこ「それじゃあ次はのこのこちゃん。はい、のこのこちゃんです。私は将来、たろーくんのお嫁さんになります」

のこのこ、読むのをやめて、前世ノートを開く。

のこ「ねえ、あなたは何が好き？」

のこのこ「水族館。ジンベイザメ。友だち。お母さんとお父さん。絵を描くのも好き。うさぎも、わんちゃんも、本も好きだよ」

のこ「あなたは何がしたい？」

のこのこ「ジンベイザメと泳ぎたい。宇宙に行って、近くで星を見てみたい。いっぱい絵を描きたい。好きなことたくさんしてみたい」

のこ「私じゃない私。あなたは何になりたいの？」

のこのこ「のこちゃんじゃないのこのこちゃん。私は何になったらいいの？」

のこ「これを読んでる私じゃない私。あなたは、あなたの好きなものになって。だってあなたは、きっと私ではないのだから」

のこのこ、駆け足で退場。

9　教室

先生「はい、それじゃあ次は神路さん」

神路さん「はい。えっと、私は将来、警察官になります。正直、とても怖いです。警察は悪い人たちをたくさん相手にしなくちゃいけません」

たろー「のこのこちゃん、作戦通りにね」

四ッ谷くん「無事に帰ってこいよ」

まり「緊張するよねえ。でもすぐ終わっちゃうよ」

神路さん「(作文を読み終える)終わりです。ありがとうございました」

先生「神路さんありがとう。それじゃあ次はのこのこちゃん」

のこのこ「はい、のこのこちゃんです。……私は将来が、まだ、決まっていません」

たろー「えっ」

まり「え？」

四ッ谷くん「え」

先生「え？」

のこのこ「私はまだまだ生きてなくて、でも、ジンベイザメと泳ぎたいということだけは、決めています。宇宙にいって星を近くで見てみたいし、サッカーの審判も楽しかったです。したいことはたくさんありますが、将来の自分、と言われても、まだよく分かりません。私の前世ノートには、将来なるものが書いていませんでした」

先生「どういうこと……？」

のこのこ「でも、私は私に、こう言ってくれました。あなたは何が好きですか。あなたは何がしたいですか。きっと、あなたはまだ小さくて、全然なんにも知りません。あなたはこれから、たくさんのものを見ます。たくさんの人と出会います。そうして、出会いを繰り返していって、あなたはあなたのやりたいことを見つけてください。あなたの将来を決めるのは、私じゃない私ではありません。私という、あなた自身です。終わりです。以上、のこのこちゃんでした」

10　神社

参拝をしているのこのこ。

ななめおじさん登場。

ななめおじさん「また来たのか」

のこのこ「うん。忘れなかったら、いなくならないって言ってたから」

ななめおじさん「そうだな」

のこのこ「神様が消えないように、私も覚えておくね」

ななめおじさん「ああ」

たろー「のこのこちゃん」

のこのこ「たろー。神様に挨拶」

たろー「うん。(参拝してから絵馬に気付き)おじさん、これは何ですか？」

ななめおじさん「絵馬。神様への願い事を書くんだよ」

のこのこ「すごく汚れてるね」

ななめおじさん「ずっとあるから仕方ないさ」

のこのこ「これじゃ神様、願い事読めない？」

ななめおじさん「いや、大事なのはそこに込めた願いだからな。汚れていても願いは届くよ」

のこのこ「よかった」

ななめおじさん「今から学校か？」

のこのこ「うん」

ななめおじさん「そうか。遅刻するなよ」

ななめおじさん、退場。

のこのこ「色んな願いがあるね」

たろー「あんまり見たら怒られるかも」

のこのこ「そうなの？」

のこのこ、ひとつの絵馬を見る。

たろー「どうしたの？(絵馬を読み)次の人生でも彼女と出会えますように。でも、願わくは、彼女が次の人生では健康で、そして、僕じゃなくていいんです。その人生で出会った素敵な誰かと、幸せでありますように。ありがとう。僕は僕として、幸せでした。へえ、ロマンチックだね」

のこのこ「うん。すごくきれいな字」

たろー「そうだね。あ、のこのこちゃんもう行かなきゃ」

のこのこ「下まで競争」

たろー「あ、のこのこちゃんずるい」

11　教室

先生「ほとんどのみんなが自分の将来について、かなり考えられたんじゃないかな？　今日で一度、将来についての授業は終わりになります。次はみんなが六年生になったときに、もっと具体的な話をしていくから、みんなこれからも自分で色々考えていくようにね。それじゃ国語の準備して休憩」

のこのこ、トイレに行く。

はなちゃん「四ッ谷くん」

四ッ谷くん「ん」

はなちゃん「四ッ谷くんはもう何か準備してるの？　サインとか考えた？」

四ッ谷くん「一応決めたよ」

はなちゃん「えー！　書いて書いて！」

四ッ谷くん「うん。(自分のノートに書いて)かっこいいだろ」

はなちゃん「かっこいいかはわかんないけど、サインちょうだい！　ね、神路さんも欲しいよね」

神路さん「う、うん」

四ッ谷くん「まだ駄目だよ。このサインまだ適当だから」

はなちゃん「えー、じゃあまたちょうだいね」

たろー「はなちゃんたちは将来に向けて準備してるの？」

はなちゃん「来年から英語習うってママが言ってるよ。でもね、前世でも勉強してたのかも」

神路さん「えー？」

はなちゃん「もう喋れるんだもん。アイアムはなちゃん。アイライクフラワー。ね？」

神路さん「うん、すごい」
たろー「神路さんは警察だもんね。何が必要なんだろう」
神路さん「お父さんが、とにかく強くなっておかなきゃって。もうすぐ空手はじめるんだ……ちょっと怖いけど……」
はなちゃん「かっこいいー！　強くなったら守ってね」
神路さん「うん……」

のののこ、教室へ。

四ッ谷くん「あ、のののこ」
まり「のののこちゃん」

のののこ、立ち止まる。

たろー「のののこちゃんは、何になるの？」
のののこ「私？」
まり「たろーのお嫁さん？」
のののこ「私は～……」
涼「君は何になるんだろう」
四ッ谷くん「ジンベーザメのお世話係？」
たろー「サッカーの審判？」
生徒全員「のののこちゃんは何になるの？」
のこ「あなたは何になりたいの？」
のののこ「私は何になるんだろう！」

おしまい